



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	過疎地域における地域づくりの集団的主体の形成に関する研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	吉田, 弥生
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14609号
Issue Date	2021-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82269
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yayoi_Yoshida_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：吉田 弥生

学位論文題名

過疎地域における地域づくりの集団的主体の形成に関する研究

本論文の課題は、文化的再生産の構造と地域社会構造の相互的な変容過程に即して、新たな価値を共有する地域づくりの協同形成の論理を究明することである。

これまでの過疎問題研究における担い手形成の議論では、地域住民の価値観の再構築から地域社会構造の変容に至るプロセスが不明確であり、特に、どのように新しい価値意識が生まれてくるのか、新しい価値観は地域社会の中でどのように共有されていくのかという論点が解明されていなかった。また、地域社会の周辺層への着目についても、先行研究では、周辺層を地域社会の中の支配的な価値観を相対化する新たな価値を持ち込んでくれる者という、地域づくりを推進するための手段として位置づけるものが中心であり、周辺層が主体的に参画する意義を踏まえたものではなかった。

この限界を乗り越えるために、価値意識や認識枠組みなどの日常意識の前提が構造的に再生産されること（これを「文化的再生産の構造」とする）に着目するアプローチを提起した。新しい価値意識に基づいた文化活動が行われる場を新たな価値の公共圏として把握し、活動の展開によって生じる住民間の対立を乗り越えることで新たな価値の公共圏が拡張され、それによって地域社会構造の変容が引き起こされるとの仮説を立てた。この検討のため、外部と協働しやすく新たな価値を獲得する傾向の高い周辺層の住民に着目して、周辺層が作り出す新たな文化の公共圏を拡張することで生じる、周辺層と中心層の対立とそれを乗り越えるプロセスをみることで、文化的再生産の構造の再構築過程とそれに伴う地域社会構造の変容を明らかにできると考えた。この問いを検討するために3つの課題に分節化し、第一に、新たな文化の公共圏を形成する端緒としての周辺層の主体形成過程、第二に、周辺層を起点とする文化の公共圏の創出・拡張から地域社会構造の変容に至る論理、第三に、以上の過程を促進する学習支援機能の解明を設定した。

以上の問いに対し、第一章から第三章では新潟県十日町市の中山間地域である飛渡地区を対象に分析を行った。

第一章では、高度経済成長期に飛渡地区をはじめとする市内山間部で行われた婦人学級の事例を取り上げ、女性の主体形成を目指した当該実践の、新たな文化の公共圏の形成における意義と可能性を考察した。分析からは、同質の困難を抱える人々の組織化は共感的関係の構築につながり、そこで行われた話し合い学習と生活記録実践は、地域社会の矛盾が生み出される構造を対象化する契機となっていた。また、生活記録を書くことは、自分の生活の中の実感に即した価値意識が対象化され、それをもとに生活を再構築したいという主体性が芽生える契機となっていた。このような矛盾を対象化する学習の蓄積によって、新たな地域社会構造の矛盾に突き当たった際も、宿命論に陥らずに、主体的に新たな価値の探索を行うことができた。ただし、実際に生活を高める主体としての力量を形成する学習がともなわなければ、学習は継続的に発展することができなかった。

第二章では、飛渡地区内にある枯木又地区の地域づくり団体「枯木又エコ・ミュージアムの会」が結成されるまでの経緯を取り上げ、周辺層が生活を高める主体としての力量を形成する学習を継続すること

で、新たな文化の公共圏が拡張し、地域社会の再編に至る論理を検討した。婦人学級では地域史を調べる学習をもとに未来に伝えたい文化活動を創出し、青年会では都市住民との交流をもとに地域づくり事業を実践し始めたのは、「過去—現在—未来」という時間軸と「都市—農村」という空間軸の視点を獲得し、そこに自分を位置付ける学習を経ることで当事者意識が生まれ、より広い視点から価値があるとみなした地域資源を活かす地域づくり実践を生みだしたからであった。

続いて、協同形成の過程については、本事例では地区内の青年と年長男性の間で地域づくりの方向性をめぐる対立が度々確認された。青年たちは、まず、大切にしたい自然や生活文化を守りつつ稼ぐ方法を検討するかたちで市場的価値と生活に根ざした価値の構造化とその具体化に取り組んだ。また、生活文化を活かした交流による誇りの形成の学習を年長男性が追体験できるよう対話的に働きかけたことで、青年が年長男性の地域づくりへの主体性の回復に寄与しており、それが協同形成につながって新たな価値に基づく公共圏が拡張していることがわかった。

第三章では、飛渡地区公民館が支援した地域づくり集団の組織化過程を事例に学習支援機能の検討を行った。地域づくり集団の組織化過程とは、周辺層の主体形成と、彼らの視点による地域づくり実践を核に異なる属性の住民が共に活動することで、地域づくりの展望が共有される過程であり、それに伴い旧来の権力構造に基づく住民の関係性が地域づくり実践に対等に参画する主体の協同関係へと再構築されていた。その過程で公民館は、主に周辺層の主体形成によるかれらの視点の公共化や分断しがちな住民の組織化のきっかけづくりとなる文化的次元の実践の組織化を行うことで、新たな文化の公共圏の形成・拡張をリードする役割を果たしていた。

以下では、明らかになった点を示す。

第一に、地域社会での新たな価値の生成過程を周辺層の主体形成を通して明らかにした。地域社会の矛盾が凝集して現れやすい周辺層が、生活の中の困難や不満を手がかりに矛盾を対象化し、継承すべきことや克服すべきことの再検討を行うことで、より根源的な生活の捉え直しがなされて新たな価値の意識化が起こっていた。その価値の内容は、地域の自然や文化を捉え直す視点を含みこんだ生活に根ざした価値であった。

第二に、地域社会構造と相互変容する文化的再生産の構造の再構築過程を明らかにした。まず、文化的再生産のあり方を時間軸・空間軸にそって拡張した視点で再検討することで、新たな地域の展望を協働的に作り出す公共圏を創出することが出来る。この新たな文化の公共圏が拡張することで、旧来の社会の文化・慣習との衝突というかたちで、これまで再生産されてきた認識枠組みとの対立が生じることになる。とりわけ、地域づくり実践では市場的・都市的価値観と生活に根ざした価値観の対立となる。そこで、生活に根ざした価値に基づく文化活動や学習実践を豊かに展開しつつ、新たな価値を実現する地域社会の経済的・政治的再生産様式を作り変える実践に取り組むことで、両者の対立に折り合いがつけられていた。生活に根ざした価値に基づく文化活動に携わる地域住民が増加するにつれて、新たな文化や価値意識を共有する協同が形成され、地域社会の文化的再生産の構造の再構築が大きく進展し、地域社会構造の変容が引き起こされていくといえよう。

第三に、公民館が果たしうる学習支援機能とは、学習活動へのアクセスや組織化の点でハンデを持つ周辺層の学習環境を作り出すことと、周辺層とほかの地域住民の協同形成を支援することであった。このような学習支援機能は、地域社会において、文化的再生産の構造の再構成につながる新たな文化の公共圏を創出・拡張するという視点から、周辺層の地域づくりへの参画の回路を拓くことになる。